

グリム童話賞

一般の部大賞

『かげろうの水の朝』

井嶋 敦子（秋田県）

こまつたような顔だ。

「会社も休みだ。車も電車も動かないなんて、とんでもない異常気象だ。テレビの電波がみだれてるのも、そのせいだ」

車も電車も動かない？

どうということだろう。

百匹の猫がひっかいたみたいなテレビ画面を、ぼくはしんげんに見つめた。

アナウンサーが、マイクにさげんでいる。

「ザザー、地球の近くを通った彗星が、ザザザ、地上の水をひきよせて、ザザー、水の分子がザザー、異常な動きを、ザザー」

猫のつめあとの下に見えたのは、飛行場を飛び立てない飛行機に、車のない道路。

飛行場で働く人たちは、月の宇宙飛行士みたいに、よりよりと、重たそうに歩いている。

ああ、だからおきた時、足が重かったんだ。こしまで水につかっただけ、プールを歩くみたいだったもの。

ぼくは、おおきく息をすってみた。

ゼリーみたいな空気が、のどから胸に、ひんやりひろがった。

なんていい香り。森の香りかな。

両手をひろげて、鳥みたいに、ばたばたさせた。わっ、なにこれ。すこし体がうかん

だ。

目の前の空気が、ゆらゆら、ゆれている。

パパが説明してくれた。

「彗星に水がひっぱられたから、空気をぜんたいに水の分子がうかん、かげろうみたいにゆれているんだ。だから、かげろう水」

「かげろうって？」

「夏のアスファルトの上で、空気がゆれるのを見たことがないかい？ あれがかげろうだ」

かげろう水か。ふしぎだな。

「ママは、かげろう水、好きだわ。おきたときから、お肌がぷるんぷるん。赤ちゃんのほっぺみたい。ほら、すてきでしょ」

ほおに両手をあてて、まんどくそうにママが言った。

「水という水が、いきいきと動いているそう。体の中にも水がある。その水の分子が、ひとつひとつ、元気になってくるんだ」

パパは、首をコキコキと、気持ちよさそうにまわして、

うっとり目を細めた。

テレビの音が言った。

「ザザ、人間の体の六十パーセントは水分、ザザー、病気の人もザザー元気になってザザ」

ふーん、そうなのか。

そういえば、画面の中の私たちは、みんなにこにこしている。

「パパ、外に出てみようよ」

ぼくは服をきがえ、パパといっしょに、よりよりと、家の外に出た。

外のかげろう水は、家の中より重かった。

道路には、車がない。

うれしくて走りだしたけど、ぜんぜん進まなかった。

地面をけると、ふわりと体がうかん、一歩で、かるく一メートルは進める。

うん、これはいいや。

のら猫が、よりよりと、ぼくの横をとおりました。

スズメが電線にしがみついていた。

ずっと空高くを、飛んでる鳥もいる。

空を見上げて、パパが言った。

「地面に近いほど、かげろう水が濃いんだ。高いところは、

かげろう水がうすくて、カラスやトンビには、飛びやすいんだらう」

ぼくのおへその前を、すすいと、とおりましたものがいた。

「わっ、パパ、魚だよ！」

川の魚が、空中を泳いでいたんだ。

「かげろう水は、やっぱり水なんだな」

なっとくしたように、パパが言った。

こんどは、川ガニが泳いでいった。

「パパ、海べだと、イルカやクジラも空中にいるのかな。そう、川はどうなってるの？」

「よし、カイト、川に行ってみよう」

ぼくたちは、近くの川へ歩いて行った。

ドブ川が、すきとおっていた。

流れがゆらめいて、魚が見える。

ドブ川にも、魚はいたんだ。流れに手をさし入れて、パパが言った。

「かげろう水と太陽の光が反応して、よごれが分解されたって、テレビで言っていたな」

五月の朝。ぼくは気持ちよめざめた。

うーん、と、のびをする。ベッドをおりたら、木の床は、しっとりとおめたくて、なんだか足が重い。

昨日の体育で、たくさん走ったせいかな。

居間で、パパとママがテレビを見ていた。

吹雪みたいなテレビ画面だ。

ザザー音のあいまに、アナウンサーの声がかきこえる。

「ザー、この異常気象は、ザザー、かげろう水とよばれてザザー、世界中でおきています」

ママが、ふりかえってぼくを見た。

「カイト、今日は、かげろう水だから、学校お休みですって。よかったわね」

「えっ、お休み？ かげろう水ってなに？」

パパもぼくを見た。